

都道府県・指定都市番号	46	都道府県・指定都市名	鹿児島県	研究課題番号・校種名	2 (1)・小学校
				領域名	伝統文化教育
研究課題	学校全体で取り組む研究課題 (1) 伝統文化教育を地域とともに推進するための教育課程の編成，指導方法等の工夫改善に関する実践研究				
ふりがな 学校名 (児童・生徒数)	きかいちょうりつそうまちしょうがっこう 喜界町立早町小学校 (児童数64名)				
所在地 (電話番号)	〒891-6151 鹿児島県大島郡喜界町塩道1048番地 (0997-66-0004)				
研究内容等掲載ウェブサイト URL	https://sosho-2.wixsite.com/kikai-somachi-e				
研究のキーワード	「PDC Aサイクル」「教科等横断的な視点」「シマゆみた (方言)・八月踊り (島の踊り)」 「地域連携」「社会に開かれた教育課程」				
研究結果のポイント	<ul style="list-style-type: none"> ○ 身に付けさせたい資質・能力を明確にした伝統文化教育の全体計画や年間指導計画 (令和元年度は第4学年のみ) を作成し，教科等横断的な視点で，発達の段階に応じた目標を意識した授業実践を行うことができた。 ○ 「シマゆみた」と「八月踊り」という二つの文化 (芸能) を柱とした伝統文化教育を通して，子供たちや地域・保護者・職員が，地域の伝統文化を継承していこうとする意識を高めることができた。 ○ 地域との交流学习を計画的に位置付けるだけでなく，島の歴史や地域の人たちの思いに触れることで地域との連携を深め，社会に開かれた教育課程の編成を行うことができた。 				

1 研究主題等

(1) 研究主題

喜界島の伝統文化に誇りをもち，受け継いでいこうとする児童を育成する教育課程の創造

(2) 研究主題設定の理由

ア 学習指導要領より

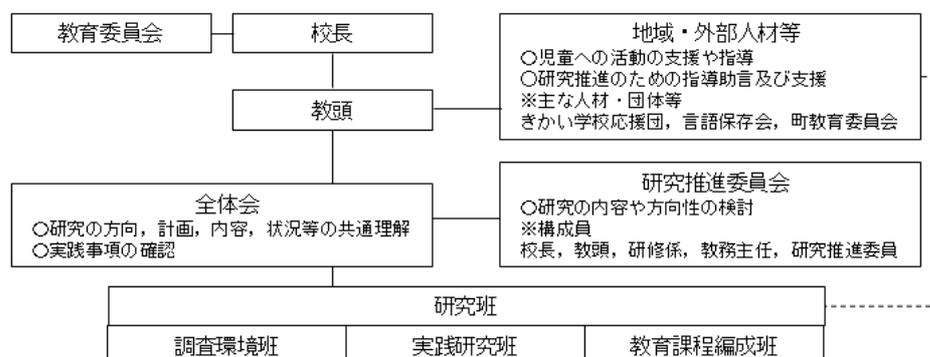
今回の改訂では，「社会に開かれた教育課程」がキーワードの一つとなっており，地域社会と連携したカリキュラムの開発，カリキュラム・マネジメントを実現するための指導方法の工夫・改善が求められている。そこで本校では，身に付けさせたい資質・能力を明確にし，「伝統や文化に関する教育」(以降，「伝統文化教育」とする)を通して，地域や関係機関・団体等との連携を深めながら，地域等の外部の教育資源を生かしたり，教科等横断的な視点で教育課程を見直し編成したりしていくことが必要だと考えた。そうした教育課程に基づいた授業改善により，地域の伝統文化を大切に受け継いでいこうとする児童の育成ができるのではないかと考える。

イ 児童の実態より

児童は喜界島に存在するたくさんの伝統や文化の貴重さに気付いておらず，それらを受け継ごうという意識は感じられない。また，学校で行う伝統文化に関わる活動も一過性のものになっていることは否めず，児童は，一時的に興味は示すが，持続性は弱く，大切に受け継いでいこうという意欲までには繋がっていない。

そこで、地域や関係機関・団体等との連携を一層図り、より興味をもって伝統文化に対する理解を深め発信する指導法の工夫や、教科等横断的な視点に立った指導についてPDCAサイクルを確立し、主題に迫りたい。

(3) 研究体制



(4) 1年目の主な取組

令和元年度	1	研究部会，全体での研究内容の共通理解（4月）
	2	P T A ・ 地域 ・ 関係機関 ・ 団体等への協力依頼（5・6月）
	3	先進校とのビデオ会議を活用した研修，アンケートの作成，集計，分析（7・8月）
	4	八月踊りの指導計画（内容や方法の検討）及び実施，掲示物等環境面の取組（9月）
	5	調査官訪問による指導，検証授業，広報委員会によるシマゆみた放送開始（10月）
	6	教科等横断的な視点に基づく年間指導計画（国語科）作成（11月）
	7	教科等横断的な視点における各教科の学びの深まりについての実践報告（12月）
	8	先進校視察，教育課程編成，1年時のまとめと次年度についての共通理解（1月）

2 研究内容及び具体的な研究活動

(1) 研究内容

- ア 教育課程の見直し改善
- イ 地域及び関係機関・団体等との連携体制の構築
- ウ 指導法の工夫改善
- エ 伝統文化教育に関する実態調査と分析・考察

(2) 具体的な研究活動

ア 教育課程の見直し改善

(ア) 指導内容及び方法の工夫改善に伴う見直し

地域と連携を図ったこれまでの取組を生かしつつ、学校全体で伝統文化教育を系統的、継続的に推進することができるように、伝統文化教育全体計画と年間指導計画を作成している。年間指導計画については、各学年の教科における伝統文化教育に関連する単元を拾い出し、一覧表にまとめる形式にすることにした。しかし、本年度は、新学習指導要領の全面実施を前に教科書が変わることを考慮し、モデリングとして第4学年のみ指導計画を作成した。

(イ) 教科等横断的な視点に立った指導の工夫

各教科において伝統文化教育を取り入れた授業実践を行った。第1学年「国語」、第2学年「図工」、第3学年「国語」、第4学年「総合的な学習の時間」、第5・第6学年「総合的な学習の時間」である。資料には「教科のねらい」と「伝統文化のねらい」、そして「伝統

文化教育に係る手立て」を明記することとした。

(ウ) 伝統文化教育に関する指導の体系化

教育課程研究指定校として伝統文化教育の推進をすることに加え、令和2年度より全面実施となる学習指導要領を踏まえ、本校にこれまでであった総合的な学習の時間の全体計画と年間指導計画を全面的に見直し、総合的な学習の時間を通して育成を目指す資質・能力と各教科等で目指す資質・能力との関連を図った、新たな全体計画・年間指導計画を作成中である。

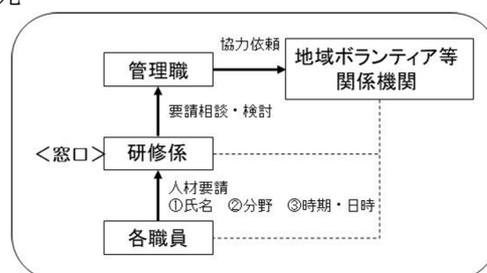
イ 地域及び関係機関・団体等との連携体制の構築

(ア) 地域と連携・協働したPDCAサイクルの確立

第4学年の総合的な学習の時間におけるシマゆみたの指導については、クラスの児童が居住している集落の区長に相談し、講師を紹介していただいた。事前に授業の流れや授業内容を打ち合わせ、一単位時間に身に付けさせたい力を共通理解して授業を行った。八月踊りの指導については、授業前に担当集落の方々と踊りの細かい動きを確認する時間を設け、児童への指導に臨んだ。更に指導後は、集落の方々と一緒に本時の学びを振り返り、次時の学習計画を改善した。

(イ) 地域人材を活用した連携体制の構築及び指導法研究

地域や関係機関・団体等との連携については「きかい学校応援団」(町教育委員会生涯学習課が主管する学校支援ボランティア団体)を活用することを原則とした。きかい学校応援団の資料の中には、支援可能分野・教科・内容が記載されているので、必要事項を確認の上、<右図>に示す流れで支援を申し込むことを職員全体で共通理解した。



また、8月に「ユンヌフトゥバ(与論の方言)」の取組を行う与論小学校とweb会議を通して研修を行い、カルタや音読カード、掲示物等、伝統文化を継承していこうとする意欲を高めるための具体的な工夫を学んだ。また、9月には、喜界島言語文化保存会の紹介で福岡教育大学の荻野准教授を特別講師に迎え、「喜界島方言の継承活動への試案」と題して喜界島の方言の位置付けや特徴を示していただくとともに、さまざまな実践の提案をしていただいた。

ウ 指導法の工夫改善(八月踊り)

(ア) 興味をもたせる導入及び取組の工夫

八月踊りについては、アンケート結果を基に課題意識をもたせるため、児童に自分のめあてを立てさせた。導入にあたっては、踊りに込められた意味や願いを地域の方から聞き、その歴史や伝統を守ろうとする意識を高めさせた。また、広報委員会による朝の放送(朝の活動の指示や本日の日程について)を方言で行い、子供たちが日常的に方言に触れる機会を作っている。

(イ) 伝統文化に対する理解を深め発信するための指導法の工夫

これまで踊りのみ取り組んでいたが、今年度、高学年は、地域の方の指導時間を増やし、歌詞の意味を学び、唄や太鼓の演奏の仕方も指導していただいた。運動会では、代表児童がマイクで唄を歌い、太鼓を叩き、他の児童は口ずさみながら演舞を行った。

(ウ) 学校と地域のつながりの深化を図る取組

毎年、八月踊りの担当地区が変わり、唄も踊りも変わるため早めに地域の担当者を把握し、管理職も含めて予定時間分の日程と計画の打合せを行った。(イ(ア)と同様)地域の練習に学校職員も多数参加し、顔を合わせて交流する機会を多く設けた。

エ 伝統文化に関する実態調査と分析・考察

(ア) 児童・保護者・職員・地域の意識及び実態調査

本研究の成果と課題を検証するため、伝統文化に関するアンケートを実施した。調査対象は、児童・教職員・地域・保護者とし、それぞれに対してアンケート調査項目を設定した上で、細かな質問項目を作成した。また、研究を進める中で「愛校心」の観点の必要性に気付き、今後その観点を増やして児童のアンケートを行うこととした。

調査対象	アンケート調査の項目
児童	「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「学習への意欲・関心」「愛校心」「郷土への誇り」
教職員	「知識・技能」「学習指導」「児童の様子」「地域とのつながり」「学習への意欲・関心」
地域	「学習への意欲・関心」「児童の様子」「地域とのつながり」「学校や教職員の取組」
保護者	「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「意欲・関心」「郷土への誇り」

(イ) 結果分析と課題把握

発達の段階に応じて特徴を掴むため、低(1・2年生)・中(3・4年生)・高(5・6年)に分けて分析を行った。学年が上がるにつれて方言や踊りへの興味や意欲、そして守っていききたいという思いが強かった。これらの思いを具現化していくために、児童が主体的に関わることができるような教材や指導内容を工夫した意図的・計画的な指導計画が必要であると考えた。

3 研究の成果と課題 (○成果●課題)

- 伝統文化教育の全体計画と年間指導計画を作成し、地域と連携共同しながら伝統文化教育を系統的、継続的に推進することができた。
- 伝統文化教育を通して、育てたい子供の姿をイメージし、発達の段階に応じて設定した到達目標に向けた学習を行ったことで、児童が地域の良さに気付き、伝統文化を大切にする思いが高まってきたことがアンケート結果より分かった。
- 地域のボランティアの方々が学校を訪れる機会が増えたことで、子供たちが、日常的に地域の方と協働して伝統文化教育について学習することができるようになった。
- 各教科における学びを深めるために、教科等横断的な視点に立った学習計画を各学年で実践しながら評価し、改善を図っていく必要がある。
- コミュニティスクールや地域学校協働活動を推進するための体制が整備されていない状況の中で、区長会に働きかけながら、地域や関係機関・団体等と実施内容・方法等の共通理解を図り、地域との協働体制を構築していく必要がある。

4 今後の取組

- ・ 学年ごとに身に付けさせたい資質・能力を明確にし、教科等横断的な授業実践を行っていく。
- ・ 伝統文化教育を継続的に推進するために、教育課程の見直しと改善を地域や関係団体と協働しながら引き続き行う。

5 研究協議会の中で協議したいこと

- 学校、地域、関係機関が共有ビジョンを作成し、カリキュラム・マネジメントを実現するために、三者が相互にどのような関わりをしていくことが必要であるか。
- (3でも取り上げたが) 各教科における学びを深めるために、教科等横断的な視点に立った学習計画をどのように組んでいくか。